

## 肝臓の機能障害の状態及び所見

### 1 肝臓機能障害の重症度

	検査日 (第1回)		検査日 (第2回)	
	年 月 日		年 月 日	
	状 態	点数	状 態	点数
肝性脳症	なし・I・II・III・IV・V		なし・I・II・III・IV・V	
腹 水	なし・軽度・中程度以上		なし・軽度・中程度以上	
	概ね 1		概ね 1	
血清アルブミン値	g/dl		g/dl	
プロトロンビン時間	%		%	
血清総ビリルビン値	mg/dl		mg/dl	

合計点数	点	点
(○で囲む)	5~6点・7~9点・10点以上	5~6点・7~9点・10点以上
肝性脳症又は腹水の項目を含む3項目以上における2点以上の有無	有・無	有・無

注1 90日以上180日以内の間隔をおいて実施した連続する2回の診断・検査結果を記入すること。

注2 点数は、Child-Pugh分類による点数を記入すること。

Child-Pugh分類	1点	2点	3点
肝性脳症	なし	軽度 (I・II)	昏睡 (III以上)
腹 水	なし	軽度	中程度以上
血清アルブミン値	3.5 g/dl超	2.8~3.5 g/dl	2.8 g/dl未満
プロトロンビン時間	70%超	40~70%	40%未満
血清総ビリルビン値	2.0mg/dl未満	2.0~3.0mg/dl	3.0mg/dl超

注3 肝性脳症の昏睡度分類は、犬山シンポジウム (1981年) による。

注4 腹水は、原則として超音波検査、体重の増減、穿刺による排出量を勘案して見込まれる量が概ね11以上を軽度、31以上を中程度以上とするが、小児等の体重が概ね40kg以下の者については、薬剤によるコントロールが可能なものを軽度、薬剤によってコントロールできないものを中程度以上とする。

(参考) 犬山シンポジウム (1981年)

昏睡度	精神症状	参考事項
I	睡眠一覚醒リズムの逆転 多幸気分、ときに抑うつ状態 だらしなく、気にもとめない態度	retrospectiveにしか判定できない場合が多い
II	指南力 (時・場所) 障害、物を取り違える (confusion) 異常行動 (例: お金をまく、化粧品をゴミ箱に捨てるなど) ときに傾眠状態 (普通の呼びかけで開眼し、会話ができる) 無礼な言動があつたりするが、医師の指示に従う態度をみせる	興奮状態がない 尿、便失禁がない 羽ばたき振戦あり
III	しばしば興奮状態または譫妄状態を伴い、反抗的態度をみせる 嗜眠状態 (ほとんど眠っている) 外的刺激で開眼しうるが、医師の指示に従わない、または従えない (簡単な命令には応じうる)	羽ばたき振戦あり (患者の協力が得られる場合) 指南力は高度に障害
IV	昏睡 (完全な意識の消失) 痛み刺激に反応する	刺激に対して、払いのける動作、顔をしかめる等がみられる
V	深昏睡 痛み刺激にもまったく反応しない	

2 障害の変動に関する因子

	第1回検査	第2回検査
180日以上アルコールを摂取していない	○ • ×	○ • ×
改善の可能性のある積極的治療を実施	○ • ×	○ • ×

3 肝臓移植

肝臓移植の実施	有 • 無	実施年月日	年	月	日
抗免疫療法の実施	有 • 無				

注5 肝臓移植を行った者であって、抗免疫療法を実施している者は、1、2、4の記載は省略可能である。

4 補完的な肝機能診断、症状に影響する病歴、日常生活活動の制限

補完的な肝機能診断	血清総ビリルビン値5.0mg/dl以上		有 • 無	
	検査日	年 月 日		
	血中アンモニア濃度150μg/dl以上		有 • 無	
	検査日	年 月 日		
	血小板数50,000/mm <sup>3</sup> 以下			
症状に影響する病歴	検査日	年 月 日	有 • 無	
	原発性肝がん治療の既往			
	確定診断日	年 月 日	有 • 無	
	特発性細菌性腹膜炎治療の既往			
	確定診断日	年 月 日		
	胃食道静脈瘤治療の既往		有 • 無	
	確定診断日	年 月 日		
日常生活活動の制限	現在のB型肝炎又はC型肝炎ウイルスの持続的感染		有 • 無	
	最終確認日	年 月 日		
	1日1時間以上の安静臥床を必要とするほどの強い倦怠感及び易疲労感が月7日以上ある			
	1日に2回以上の嘔吐あるいは30分以上の嘔気が月に7日以上ある		有 • 無	
	有痛性筋けいれんが1日に1回以上ある			

該当個数	個
補完的な肝機能診断又は症状に影響する病歴の有無	有 • 無